<table>
<thead>
<tr>
<th>Title</th>
<th>源氏物語文体攷：「うし」「心うし」を中心に</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Author(s)</td>
<td>中川, 正美</td>
</tr>
<tr>
<td>Citation</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Issue Date</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Text Version</td>
<td>none</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/11094/42815">http://hdl.handle.net/11094/42815</a></td>
</tr>
<tr>
<td>DOI</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>rights</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
論文内容の要旨

本論文は、源氏物語を対象として、文学作品の文体を語彙論を基礎として導き出したキーワード、『うし』『心うし』から考察しようとするものである。本論文は「はじめに」、序論「形容詞からみた平安仮名文の文体」、本論「『うし』『心うし』からみた源氏物語の文体」、「おわりに」からなる。（400字短編用紙換算800枚）

「はじめに」では、源氏物語に作品としての個別的な特徴があるかどうかの検討を要すると指摘し、作品の語彙の計量的な分析だけにとどまらず、文学の内容に踏み込んで、語の意味用法を検討する必要があると述べている。

序論の第一章では、八代集と万葉集を比較し、特に形容詞の使用頻度、使用順位、使用法から平安和歌と万葉集との違いを明かにし、第二章では、源氏物語の散文部分に三〇例以上みられる形容詞一五一一語が、先行作品にも認められることを確認して和文の形容詞とされ、和文の形容詞は和歌の形容詞を包含していることを示し、和歌に用いられない和文特有の形容詞を考察した。第三章では、源氏物語と平安和歌ととの使用の多寡を、第四章では紫式部日記との使用の多寡を作品の長さから考察し、源氏物語は美意識においても用法においても、先行作品や紫式部日記とは異なることを指摘し、作品としての文体を考えることができるとする。第五章で、文学作品の文体を考えるには語彙構造を基盤とし、さらに細やかな語の用法に分け入る必要があると述べ、源氏物語で、歌ことばとして多用され和文にも取り入れられていく「うし」と、「うし」から派生し専ら和文に用いられている「心うし」をキーワードと考えられたとした。

本論の第一章では平安和歌における「うし」の語義用法について論じている。第一では、「うし」が和歌特有の意味を担った歌ことばとして形成される過程を、第二では、「うし」と掛けられる景物を分析し、第三でことば「うし」の語義は事象を認識しての無意識であると論じている。第二章では平安和歌における「心うし」の語義用法について論じている。第一では、同じ和歌で同じ構成の共通語でも、平中物語には大和物語・今昔物語集・十訓抄にみられる「心うし」が認められないことを指摘し、第二では、宇津保物語や枕草子の用例から「心うし」は口頭語であったとするが、落語物語では文の文に用いて対立関係を表し、主題につながる表現としていると指摘し、第三では、口頭語の「心うし」を地の文に早くに用いた私は日記について述べている。

第三章では、源氏物語における「うし」「心うし」の語義を類義語と比較して探り、物語における役割を考察している。第一では、「うし」は「ものうし」に対して状況を総合的に認識した結果の嘆きであり、「心うし」は「つらし」に対して、個人的に共感し信頼する相手に裏切られたときの瞬間的な反響であるとする。第二では、「うし」「心うし」
の使用の偏りに注目し、第一部では「うし」と「心うし」で女君を成型し分け、第二部では「心うし」の有無で事件に対する反応を分けていると述べ、第三では、統編での「うし」「心うし」による人間関係を探っている。そして、第四章では、源氏物語における「うし」「心うし」の用法を先行の和歌和文と比較して源氏物語の独自性を探り、本論のまとめとしている。

最後に「おわりに」を置いて全体をまとめ、今後の課題にもふれて締めくくりとしている。

論文審査の結果の要旨

「文体」という用語には、漢文や仮名文というような文章様式に認められる類別的な特徴を言う場合と、ある作者や作品に認められる文章の個別的な特徴を言う場合があるが、従来の国語学的文体論では文の長短や品詞比率から文章様式を比定する研究を主としていた。文学作品の個性を表す美意識や主題を解明する研究、文学作品の文体を客観的な立場から考察する研究は著しく立ち後れている。

そのようななかで、本論文は、表現主体の意図を端的に表し、かつ、現在より種類も豊富で多用されている形容詞を取りあげて、語彙論の観点から文学作品の文体の考察を展開していくとしているのである。

序論では、先行の和文作品や楚歌例日記と源氏物語に比較して、源氏物語には作品としての個別的な特徴が存しており、源氏物語の文体というテーマが成り立つことを検証してキーワードとなる語を選定している。本論で、その語義や用法、類義語との使い分けを和歌や和文の先行作品と比較して源氏物語の文体を考察していくという、類別的研究から個別的研究へと段階を踏んだ考察を行っている。

ここでとった方法は、文体研究に一つの新しい方法を示したものと言えよう。その正否は今後に待つところであるが、本論文で述べられたところに注目すべきところが多い。

源氏物語が歌集や先行の和文作品、また楚歌例日記と比較して、語彙的に（特に形容詞の用法）に特色のあることを示したところも興味深い。「うし」「心うし」が諸作品において、また源氏物語においてどのように使われているかを、場面や人物の成型と合わせて明らかにしたところも高く評価される。

もちろん、今後に残された課題のあることでも当然である。歌の語彙というものを文体論の中でどう位置付けてゆくかに問題がある。またここに取り上げていない語においても、「うし」「心うし」などと同様に考えてゆく事が出来るかどうかも問題である。しかし、本論文がこれまでの研究の遅れをとられた分野の研究に一つの方法を示したことは高く評価されよう。このような次第で本研究所委員会は本論文を博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。